

「布教」の構造

—個人別態度構造分析を用いた検討—

細川怜椰

現在、日本ではオタクと呼ばれる存在が広く認知されている。このオタクについての研究はこれまで、主に社会学の分野でなされてきた。中でもオタク文化、特に「聖地巡礼」や「二次創作」などのオタク特有の行動について、その実態や影響を取り上げた研究は多い。このオタク文化の行動の一つに「布教」が挙げられる。「布教」とはオタク自らが好きなものを他人に広めようとする行為のことである。一般的には「布教」は一方的なおすすめだと考えられており、ウザいやしつこいといったマイナスイメージを持たれてきた。しかしそれらはあくまで一般的なイメージであり、布教という行動の実態は未だ明らかになっていない。そこで本研究では「布教」と呼ばれる行為の実態を掴むことを目的とし、「布教」を行う人々がどのようなことを意識して布教しているのかを明らかにする調査を行なった。

手法にはPAC分析（個人別態度構造分析）を採用した。PAC分析ではインタビュー調査のような質的調査に加え、調査協力者の考える要素に定量的な評価を与えることで個人の態度構造を明らかにすることができる。そこで調査対象者を「布教」を行った自覚を持つ大学生4人とした。「あなたはマンガやアニメの布教をする際に意識したり気をつけていることはありますか。自分の経験や考えたことを自由に言葉にしてください。（単語でも）文章でも構いません。」という連想刺激文を使用して、調査対象者から「布教」に対する意識構造の抽出を試みた。

分析の結果、4人の布教をする際の態度が明らかになった。協力者Aにとっての布教は相手の好きそうなものを見せてみるお試しのような行動であった。協力者Bにとっての布教は一緒に楽しめる仲間を作る手段の一つであった。協力者Cにとっての布教は自身の作品への愛を前面に出す場であり、自身の話に興味を持ってくれる人を探す手段であった。協力者Dにとっての布教は仲間内で盛り上がる非日常的な体験であった。4人の分析を通して、布教を行う意味はそれぞれ違うことが明らかとなった。一方で4人の連想項目や発話などから「作品への愛」、「相手への気配り」、「一緒に楽しみたい」の3つの共通点が得られた。「作品への愛」は布教のモチベーションや戦略に影響があり、「相手への気配り」には相手との関係性や布教の戦略への意識が見られた。この2つは相手と「一緒に楽しみたい」という思いに繋がっていることがわかった。相手と一緒に楽しむためには布教する側は作品についての知識と作品に対する感情を同時に共有する必要があることも明らかとなった。これらから布教の構造の一部が布教する側の視点から明らかになったと言える。布教する側からの一方的な行為であると思われていた布教が実は相手の存在を強く意識し尊重している行為であったことから、布教の実態を明らかにすることが出来たといえよう。

今後の課題は、布教する側の調査対象を拡大した調査を行うこと、布教される側に着目した調査を行うことである。両者の調査分析を通して、布教のさらなる実態の解明が進むと同時に、布教する側と布教される側の人間関係やコミュニケーションについて情報学的な成果が期待できると考える。

（指導教員 松村敦）